

有部行為論における無表の役割

清水 俊 史

【抄録】

本稿は、『俱舍論』を中心に有部阿毘達磨の法相を検討することで、行為一般を構成する無表（非律儀非不律儀）が当該行為に対していかなる役割を担っているのかについて考察した。結論として、1）根本業道に無表が設定される理由は、因果の時間的逆転現象を防いで三世実
有説に基づいた因果則を守るためである点と、2）行為の構成要素の一つである無表は、その
当該行為の軽重を決定する助因としての役割を担っている点を指摘した。

キーワード：非律儀非不律儀、根本業道、造作業／増長業、与果／取果、三世実有

0. 問題の所在

本稿は、有部行為論において無表（avijñapti）が如何なる役割を果たしているのか、という点を検討する。ここでの「行為」とは、殺生などといった世間的・世俗的な意味での継続的な行動一般を意味する。有部における無表は、“妨善妨悪の機能をもつ後天的習慣性”すなわち「戒」として有部に導入されたことが多くの先行研究によって指摘されている⁽¹⁾。しかしながら有部論書では、妨善妨悪（戒）の機能をもたない非律儀非不律儀の無表が、業道や福業事と関係して説かれていることも事実である。これは、有部論書において説かれる無表の実有論からも確認することが出来る。『俱舍論』（AKBh.）では、無表の存在証明として次の八証が挙げられる。

- （1） 無見無対色が經典に説かれている⁽²⁾。
- （2） 無漏色が經典に説かれている⁽³⁾。
- （3） 有依福業事による福德の増大が經典に説かれている⁽⁴⁾。
- （4） 自ら実行せず、他者に命令して行為を遂行させた場合には、無表がなければ根本業道
が成立しない⁽⁵⁾。
- （5） 十一処に含まれない無見無対の色が經典に説かれている⁽⁶⁾。
- （6） 無表がなければ、入定した者には正語・正業・正命が存在しなくなってしまう、八正
道が揃わなくなってしまう⁽⁷⁾。

- (7) 無表がなければ別解脱律儀が存在しないことになってしまう⁽⁸⁾。
 (8) 経典には犯戒を止める遠離が、堤防 (setu) という実体として説かれている⁽⁹⁾。

この八証のうち二つ、すなわち証明 (3) が福業事と、証明 (4) が業道と関係している。また『大毘婆沙論』において説かれる表・無表の实在論でも上記の証明 (4) に相当する理論が説かれ⁽¹⁰⁾、さらに『成実論』においても証明 (3) (4) に相当する記述が見られる⁽¹¹⁾。このように無表は、当初は戒として有部に導入されたとしても、時代が下り『大毘婆沙論』や『俱舍論』が編纂される頃になると、戒としてだけではなく行為一般を成立させるための重大な要素として受け入れられていたことが確認される。

上述のように業道として無表が設定されることを受けて、明治から大正にかけて当時の学界は、業と果をむすぶ媒介者としての役割が無表にはあると理解していた。この理解が誤りであることを証明したのは加藤精神と荻原雲來である。しかしながら両者ともに「三世実有説に基づいて過去の業は、媒介者なしに直接的に未来に果を生みだすことが出来る」と主張することで従來說を破折するにとどまり、業道として設定された無表がどのような役割を担っていたのかについては検討していない⁽¹²⁾。その後の多くの無表研究も、初期有部論書を検討して無表の起源を探ることを主目的としており、一部の概説的な言及⁽¹³⁾を除けば非律儀非不律儀の無表の持つ役割が研究対象とされることはなかった⁽¹⁴⁾。これを受けて本稿では、このような行為一般を構成する無表、すなわち非律儀非不律儀の無表が、1) 何故に根本業道に設定される必要があるのか、2) 当該の行為に対してどのような役割を担っているのか、という二点を考察する。

1. 根本業道としての無表

第一の問い「何故に無表が根本業道に設定される必要があるのか」について考察を進める。この問いが取り上げられるのは「身語の業道が完成した刹那に当人に表 (vijñapti) が起きていなければ、その刹那に生じる無表 (avijñapti) が根本業道として設定される」という場合である。具体的には、A) 他人に依頼をして殺人などの目的を達成しようとする場合と、B) 自らの手で殺人などを実行するも、切り付けなどの表層的な肉体的行為が既に終わってしまった後で殺人などの目的が達成される場合とに、どうして無表が根本業道として生じる必要があるのか、ということである。

まず、Aの場合を検討する。AKBh. では、他者に殺人を依頼して目的を達成した場合 (殺人教唆) を例にとりて、このような場合には命令者にとって何が殺生業道の本体になるのか、次のように説いている。

AKBh. (p. 196.16-18):

akurvataś ca svayaṃ paraiḥ kārayataḥ karmapathā na sidhyeyur asatyām
avijñaptau / na hy ājñāpanavijñaptiḥ maulaḥ karmapatho yujyate / tasya karmaṇo
'kṛtatvāt / kṛte 'pi ca tasyāḥ svabhāvāviśeṣād⁽¹⁵⁾ iti /

また、もし無表 (avijñapti) がなければ、自ら為さず他の人々に為さしめる者に諸の業道が成立しないであろう。なぜなら、命令の表 (vijñapti) は根本業道として相応しくないからである。その業が未だ為されていないからである。また、〔他者によってその業が〕為されたとしても、それ (命令の表) に自性の差異はないからである、と。

すなわち、命令の表は根本業道にはなり得ないのであるから、目的が達成される瞬間に無表がなければ根本業道が成り立たないと理解されている。これは、経部の無表仮有論に対抗してその実有性を立証するための一文であり、既に『大毘婆沙論』巻122 (T27. 634c21-24) においてもこれと同趣旨が説かれるため、有部にとって無表実有論の重要な根拠の一つであると考えられる。しかしながら上記の AKBh. の文面はあまりに簡略であり、どうして命令した時の表が根本業道に再設定することが出来ないのかについて大意を掴みにくい。これについて AKVy. は次のように説明する。

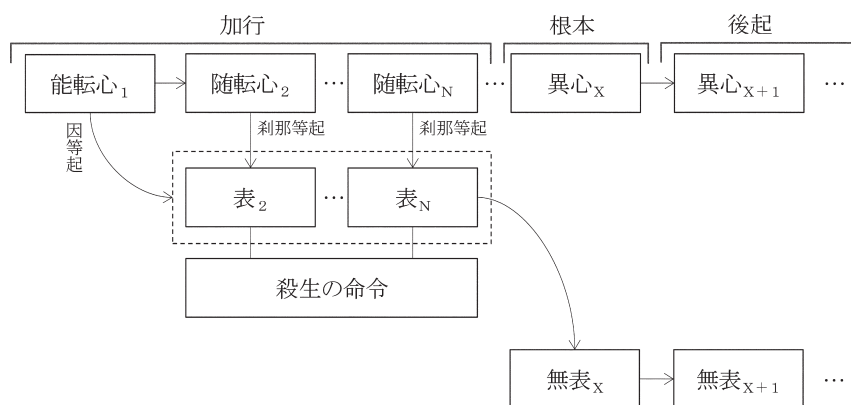
AKVy. (pp. 354.31-355.4):

na hy ājñāpanavijñaptiḥ maulaḥ karmapatho yujyate⁽¹⁶⁾. Tasya prāṇātipātādi-
karmaṇo 'kṛtatvāt. syān matam. kṛte tasmin karmaṇi tadājñāpanavijñapteḥ kar-
mapatho bhaviṣyatīti. atra idam ucyate. **kṛte 'pi ca tasyāḥ svabhāvāviśeṣād iti.** pareṇa
kṛte 'pi tasmin (p. 355) karmaṇi tasyā ājñāpanavijñapter na kaścit svabhāvāviśeṣo
'sti, yena tadānīm karmapathaḥ syāt. tasmāt pūrvavat tasyāḥ svabhāvāviśeṣāt. yath-
aiva pūrvam⁽¹⁷⁾ karmapatho na vyavasthāpyate. tathaiva paścād ity ato 'stīty
abhyupagantavyā yāsau tadānīm utpadyate karmapathasamgr̥hīteḥ.

なぜなら、命令の表 (vijñapti) は根本業道として相応しくないからである⁽¹⁸⁾。その殺生などの業が未だ為されていないからである。「〔他者によって〕その業が為されたとき、〔命令者の、〕その命令の表が業道になるだろう」と考えるかもしれないが、これに対して次のことが説かれる。「また、〔他者によってその業が〕為されたとしても、それ (命令の表) に自性の差異はないからである」と〔は次の意味である。即ち〕他者によってその業が為されたとき [355]、その命令の表には、それによってその時 (他者によって業が為された時) 〔その命令の表が〕業道となるような、いかなる自性の差異もない。従って、前と同じく〔命令の表は加行のままであり、業道になるということはない〕。そ〔の命令の表〕に自性の差異がないからである。先に業道として建立されないのと全く同様に、後に

も〔建立されることはない〕のである。それゆえに、その時〔即ち他者が業を為した時〕に、業道に摂められるものとして起こる〔ところの〕、こ〔の無表 (avijñapti)〕はあると承認されるべきである。

すなわち過去に落謝した命令の表の自性は、その後の事情の如何によって変化することはない。それゆえに、目的が達成された瞬間に根本業道となる法が、命令の表とは別に生じていなくてはならない。上記の AKBh. および AKVy. における記述が想定している殺人教唆を、行為の構造にあてはめると次のようになる。



上図においては、能転心₁が「誰某を殺してやる」と決意した心にあたり、表_{2-N}が「誰某を殺せ」という殺人の命令にあたり、その後に殺者が殺人に成功した刹那_xに命令者に生じる無表_xが根本業道にあたる。

有部の理解に従えば、殺者が殺生を達成した刹那_xには、既に指示者による命令の表 (vijñapti) は過去に落謝してしまっているため、その後に殺人が成功したからといって、命令の表_{2-N}を根本業道に再設定することは出来ない。そして、命令が伝えられた時点では未だ殺生の成功/不成功までは決定していないのであるから、命令されただけの段階で表_Nもしくは表₂を根本業道として設定することは、未だ殺生が完成していないのに殺生業を犯したという矛盾に陥ってしまう。このような場合に殺生業を合理的に説明するために無表 (avijñapti) を想定する必要がある、と有部は考えるのである。

以上のような、根本業道の刹那において表が現起していない場合に、その刹那に無表が生じて根本業道に設定されることは⁽¹⁹⁾、命令の場合だけではなく、先の述べたBの場合、すなわち自ら為す場合にも当然あてはまる。『大毘婆沙論』ではこの例として、アジャータシャトルが父王を殺害する例と⁽²⁰⁾、外道が目連を殺害する例とを挙げている⁽²¹⁾。すなわち、犯行者 (アジャータシャトル、外道) が自ら幽閉・攻撃し、それを為し終えた時には未だ被害者 (父王、目連) は存命しており、それより時間を隔ててから死んだ場合である。この場合にも、既

に過去に落謝した表を業道に再設定することは不可能であるため、やはり無表という別法が目的達成の瞬間に生じていると想定しなければ、殺生業を合理的に説明することが出来ない。

1. 2. 取果・与果

このように無表が業道として生じていなければならない理由は、有部の三世実有説に基づく取果・与果の因果則からも確認することが出来る。有部では業が為されたその瞬間に、未来にどのような果を引くか予約され（取果）、この業は過去に落謝していても予約された果を与える（与果）能力があると考えられている。このうち取果について、有部法相によれば、法は現在に有る時のみ果を取ることが可能である。

AKBh. (p. 96.10-13):

athaiṣāṃ hetūnāṃ katamo hetuḥ kasmin kāle phalaṃ pratigṛhṇāti dadāti vā /

vartamānāḥ phalaṃ pañca gṛhṇanti (2, 59ab)

nātītāḥ pratigṛhītatvān nāpy anāgatā niṣpuruṣakāratvāt / kāraṇahetur apy evam /

sa tu nāvaśyaṃ saphala iti nocyate /

【問】さて、これら〔六〕因のうち、何れの因が何れの時に果を取り、あるいは〔果を〕与えるのか。

現在なる五つが、果を取る。(2, 59ab)

過去なる〔五つ〕は〔果を取ら〕ない。既に〔果が〕取られているからである。未来なる〔五つ〕も〔果を取ら〕ない。土用が無いからである。能作因も同様に〔現在のみ果を取る〕。けれどもそれ（能作因）は必ず果を持つわけではないので、〔本頌に〕説かれていない⁽²²⁾。

また、与果については、その法が現在か過去に有る時のみ果を与えることが可能であり、とりわけ本論において問題となる異熟因（＝業）となる法は、それが過去に有る時のみ異熟果を与えることが出来る。

AKBh. (pp. 96.14-97.9):

dvau prayacchataḥ / (2, 59b)

sahabhūsaṃprayuktakāhetū varttamānau phalaṃ prayacchataḥ / samānakālam eva

hy anayoḥ⁽²³⁾ phaladānagrahaṇam /

varttamānābhyatītau dvau (2, 59c)

phalaṃ prayacchataḥ sabhāgasarvatragahetū / yuktaṃ tāvad yad atītāv iti / atha

kathaṃ varttamānau niṣyandaphalaṃ prayacchataḥ / samanantaranivarttanāt /

nivṛtte tu phale tau cābhyatītau bhavataḥ / phalaṃ cāpi dattaṃ na punas tad eva dattaḥ / ...中略... /

eko 'tītaḥ prayacchati // 2, 59d //

vipākahetur atīta eva phalaṃ prayacchati / yasmān na saha vā samanantaro vāsti vipākaḥ /

二は〔現在にある時、果を〕与える。(2, 59b)

俱有・相応の両因は、現在にある時に果を与える。なぜなら、これら二〔因〕の与果と取〔果〕とは、必ず同時にあるからである。同類・遍行の

二は、現在と過去にある時に、(2, 59c)

果を与える。【問】 まず、過去にある〔二因が与果することは〕理に適っている。しかるに、どうして現在にある〔二因〕が等流果を与えるのか。【答】〔因の〕無間に〔果が〕転起するからである。けれども果が転起した時に、その二つは過去においてあり、そして果を既に与えているから、同じそれ（既に与えられた果）を再び与えることはない。…中略…。

一は、過去にある時に〔果を〕与える。(2, 59d)

異熟因は過去にある時にのみ果を与える。なぜなら、俱に、あるいは無間に異熟はないからである⁽²⁴⁾。

したがって、未来の事情が過去に何らかの影響をもたらすことは法相上あり得ない。なぜなら、時系列上より後に生じた法が、それより前に起きた事象を取果したり与果したりすることは決してないからである。よって「殺人が達成された」という事実が未来に何らかの影響を及ぼす場合には、必ず殺人が達成された瞬間に根本業道となる法が生じていて、さらにその瞬間にその法が取果をなさなければならない。しかし、もしその瞬間に表が生じていない場合には、その瞬間の心・心所法や無為法といった非色法に、色法である殺生業道（身業）としての役割を任せられないことは明白であるから⁽²⁵⁾、有部はどうしても無表という特殊な色法を想定せざるを得ない。

1. 3. まとめ

以上を要約すれば根本業道において無表が設定される理由は、三世実有説に基づいた因果則を守るためであり、後に起きた出来事が、時間を遡って過去の事象に影響を与えるという「因果の時間的逆転現象」を防ぐためであると考えられる。これと同趣旨は『大毘婆沙論』、『順正理論』、『藏頭宗論』からも確認することが可能であり⁽²⁶⁾、有部における無表の主要な役割の一つとして理解されていたことが伺える。

2. 助因としての無表

続いて第二の問い「無表は当該行為に対してどのような役割を果たすのか」について考察する。ここでの「行為」とは、殺生などといった世間的・世俗的な意味での継時的な行動一般のことであり、無数の表 (vijñapti)・無表 (avijñapti) によって構成されているところのものである。ここでの結論を先んじて言えば、このような行為を構成している無表の役割は、その行為全体の軽重に、すなわちその行為が未来に重大な影響を与えるものになるかどうかを決定する助因になると有部は考えている。『順正理論』では、無表のもつこのような役割が明確に説かれる。

『順正理論』巻35 (T29. 543a11-17):

非牽引力即令當來愛非愛果決定當起。除能教者能起表思。若於後時善心相續。乃至使者事究竟時。無表若無。更無別法。於非愛果能為圓滿助因。可得果應不生。若加行心。即能令果決定當起。不須滿因。使者或時不為殺事。教者非愛果亦應決定生。既不許然。故汝經部。於業果理。極為惡立。

牽引の力、即ち当來の愛・非愛の果をして、決定して当に起こらしむるに非ず。能教者の能く表を起す思を除き、若し後時に於て善心相續し、乃至、使者の事の究竟する時まで、無表若し無くば、更に別法の、非愛の果に於て能く圓滿の助因と為るものなし。得べき果も応に生ぜざるべし。若し加行の心、即ち能く果をして決定して当に起らしめ、満因を須ひざれば、使者或る時殺事を為さざるも、教者の非愛の果亦応に決定して生ずべし。既に然りと許さず。故に汝經部は業果の理に於て極めて惡立となす。

すなわち、命令者が殺者に殺人を依頼して、その殺人を決心した命令者の思が何らかの果をもたらす場合には、殺人が達成された瞬間に無表なる別法が命令者に生じて、その無表が先に起こした思（業）に対して、その果をより決定的に起こらしめる助因として働く⁽²⁷⁾。もし、殺人に失敗すれば根本業道として無表が生じないため、その命令者の犯した思（業）は、果を起こすための助因を欠くことになる⁽²⁸⁾。

もちろん上記の言及は、殺人の命令をして以降、悪心や自ら実行する表が生じていない場合を想定しているものであり、もしも悪心が生じていたり、自ら殺生を実行することで表が生じていたりする場合には、それら悪心や表が助因となることも当然あり得ると考えられる⁽²⁹⁾。

2. 1. 業の軽重

このような助因としての無表の役割は、他の箇所からも確認することが出来る。ある業が重大な異熟を招くようになるか、それとも軽微な異熟を受けるだけで済むのか、という「業の軽

重」を決定する要因として、有部は、(1) 後起、(2) 田、(3) 依処 (=業道)、(4) 加行、(5) 思、(6) 意欲という六要素があると理解している。AKBh. と AKVy. には次のようにある。

AKBh. (p. 271.7-16):

karmaṇaṃ tu gurulaghutvaṃ jñātukāmena samāsataḥ ṣaṭ kāraṇāni jñeyāni /
tadyathā

prṣṭhaṃ kṣetram adhiṣṭhānaṃ prayogaś cetanāśayaḥ /

eṣāṃ mṛdvdhimātrativāt karmamṛdvdhimātratā // 4, 119 //

prṣṭhaṃ nāma yat kṛtasya punar anukriyā / kṣetram nāma yatra kārāpakārāḥ
kriyante / adhiṣṭhānaṃ karmapathaḥ / prayogas tadarthaṃ kāyavākkarma / cetanā
yayā karmapathaṃ niṣṭhāpayati / āśayas tadabhiprāya evaṃ caivaṃ ca kuryām
evaṃ caivaṃ ca ⁽³⁰⁾ kariṣyāmi /

さて、諸業に軽重あることを知ろうと欲する者は、概略として六因を知るべきである。すなわち、

(1) 後起と、(2) 田と、(3) 依処と、(4) 加行と、(5) 思と、(6) 意欲とである。これらに上品と下品があるゆえに、業にも上品と下品がある。(4, 119)

(1) 「後起」と呼ばれるものは、為されたことをさらに引き続き為すところのそれである。
(2) 「田」と呼ばれるものは、ある者に対して利益もしくは損害が為されるところのその者である。(3) 「依処」とは、業道である。(4) 「加行」とは、それ(業道)を目的とする身語業である。(5) 「思」とは、それによって〔人が〕業道を究竟せしめるところのものである。(6) 「意欲」とは、「このように、あのようには為したい」または「このように、あのようには為すだろう」という、それらの志向である。

kasyacit prṣṭhaparigraheṇaiva tat karma guru saṃpadyate / vipākanaiyamyāvasth-
ānāt⁽³¹⁾ / kasyacit kṣetravaśenaiva / tatraiva kṣetre punar adhiṣṭhānaśāt guru
saṃpadyate nānyathā / yathā mātāpitroḥ prāṇātipātāt na tv evam adattādānādikāt /
evam anyad api yojyam / yasya tu sarvāṇy adhimātrāṇi bhavanti tasyātyartham
adhimātraṃ guru karma veditavyam / yasya mṛdūni tasyātyarthaṃ mṛdu
veditavyam //

ある人にとっては後起に属するものによってのみ、その業は重いものとなる。異熟の決定性を確立するからである。ある人にとっては田によってのみ〔その業は重いものとなる〕。さらに、同じその田であっても、依所により重いものとなるが、さもなくば〔そうではない。例えば母・父を殺せば〔重いものとなるほどには〕、〔母・父から〕盗むことなどを為しても〔重いものとはなら〕ない。他〔の因〕も同様に適用されるべきである。また、

ある者にとって〔六因の〕すべてが上品であれば、その者の業は極めて上品で重い、と理解すべきである。ある者にとって〔六因のすべてが〕下品であれば、その者の〔業は〕極めて下品であると理解すべきである。

AKVy. (p. 435.12-19):

vipākanaiamyāvasthānād iti. niyatavipākadānāvasthānād ity arthaḥ. **kasyacit kṣetravaśēnaiveti.** tadyathā. sāmānyapuruṣavadhāt pitṛvadhāḥ. **tatraiva kṣetre punar adhiṣṭhānavaśād** iti. karmapathavaśāt. katham ity āha. **mātāpitroḥ prāṇātipātānāt** guru karma **na tv evam adattādānādikāt** guru. na hi mātāpitror dravyāpaharaṇākarma tadvadhavat guru bhavati tadvadhasyāna ṁ taryasva-bhāvatvād. **ādiśabdena mṛṣāvādapaiśūnyādigrahaṇaṁ.** **evam anyad api yojyam** iti. kasyacit prayogaviśeṣeṇa guru sampadyate vipākanaiamyāvasthānāt. kasyacid cetanāviśeṣeṇa. kasyacid āśayaviśeṣeṇa.

「異熟の決定性を確立するからである」とは、「決定した異熟を与えること（与果）を確立するからである」という意味である。「ある人にとっては田によってのみ」とは、例えば一般の人を殺すより父を殺す方が〔重い業となる〕ようにである。「さらに、同じその田であっても、依所により」とは、「業道により」である。【問】どのようにか。【答】答える。「母・父を殺せば重い業となるが、〔母・父から〕盗むなどを為しても重い〔業とはなら〕ない」と。なぜなら、母・父の財産を奪う業は、彼らを殺害することほどに重いものとはならないからである。彼らの殺害は無間〔業〕を自性とするからである。「など」の語によって、虚誑語・離間語などを含んでいる。「他〔の因〕も同様に適用されるべきである」とは、ある人にとっては加行の卓越なることによって重いものとなる。異熟の決定性を確立するからである。ある人にとっては思の卓越によって〔重いものとなる〕。ある人にとっては意欲の卓越なることによって〔重いものとなる〕。

この六因のうち、（１）後起、（３）依処（＝業道）、（４）加行の三つは身語業から構成されるものであるから、そこに属する表と無表とを指しているものと考えられる。ここでは、六因すべて揃う場合が最も重い業になると説かれていることから、複数の表や無表などが相互に影響力を及ぼしつつ、当該行為の軽重を決定するものと考えられる。これと同趣旨は『順正理論』巻44(T29. 593b27-c10);『藏頭宗論』巻24(T29. 890b25-c06)においても説かれる。

2. 2. 造作業／増長業

また無表（avijñapti）の助因としての役割は、造作業／増長業の分類定義からも確認することが出来る。すなわち造作業とは比較的軽い業であり、増長業とはそれより重大な業であるが、

造作業が増長業になるための基準には（１）故意，（２）円満，（３）悪作，（４）助伴，（５）異熟という五つがあるとされる。AKBh. には次のようにある。

AKBh. (pp. 271.17-272.4):

kṛtaṃ copacitaṃ ca karmocyate / kathaṃ karmopacitaṃ bhavati / pañcabhiḥ
kāraṇaiḥ⁽³²⁾ /

saṃcetanasaṃāptibhyāṃ niṣkaukṛtyavipakṣataḥ /

parivārād vipākāc ca karmopacitam ucyate // 4, 120 //

(1) kathaṃ saṃcetanataḥ / saṃcintya kṛtaṃ bhavati nābuddhipūrvam na sahasā
kṛtam / (2) kathaṃ samāptitaḥ⁽³³⁾ / kaścid ekena duṣcaritenāpāyān yāti kaścid
yāvat tribhiḥ / kaścid ekena karmapathena kaścid yāvad daṣabhiḥ / tatra yo yāvatā
gacchati tasminn asaṃāpte kṛtaṃ tat karma nopacitam samāpte tūpacitam / (3)
kathaṃ (p. 272) niṣkaukṛtyavipakṣataḥ / nirvipratīṣāraṃ ca tat karma bhavati
niṣpratīpakṣam ca / (4) kathaṃ parivārataḥ / akuṣalam cakuṣalaparivāraṃ ca
bhavati / (5) kathaṃ vipākataḥ / vipākādāne⁽³⁴⁾ niyataṃ bhavati / evaṃ kuṣalam
api yojyam / ato 'nyathā karma kṛtaṃ bhavati nopacitam /

【問】〔経には〕造作と増長との業が説かれる。どのように業は増長したものとなるのか。

【答】五つの原因によってである。

（１）故意と（２）円満とにより，（３）悪作と対治がないことにより，（４）助伴により，及び（５）異熟により業は増長したものであると言われる。（4, 120）

（１）【問】どのように，故意により〔増長したものとなるのか〕。【答】意図してから為されたのであって，先に覚知しないのでもなく，咄嗟に為されたのでもない〔業である〕。

（２）【問】どのように，円満により〔増長したものとなるのか〕。【答】ある者は一つの悪行によって諸悪趣へ行き，乃至，〔別の〕ある者は三つ〔の悪行〕によって〔諸悪趣へ行く〕。ある者は一つの業道によって〔諸悪趣へ行き〕，乃至，〔別の〕ある者は十の〔業道〕によって〔諸悪趣へ行く〕。〔必要な〕量〔の業〕によって人は〔諸悪趣へ〕行く場合，その〔量〕が満たされていないならば，その業は造作〔業〕であり増長〔業〕ではないが，満たされていれば増長〔業〕である。（３）【問】どのように，〔272〕悪作と対治とがないことにより〔増長したものとなるのか〕。【答】その業が後悔を伴わず，及び対治を有していないものである。（４）【問】どのように，助伴により〔増長したもの〕なのであるか。

【答】不善であって，さらに不善の助伴をともなう〔業〕である（５）【問】どのように，異熟により〔増長したものとなるのか〕。【答】異熟を与えることについて決定しているものである。同様に善にも適用されるべきである。もし以上のものでなければ，業は造作されたものであり，増長したものではない。

AKVy. (p. 435.24-26):

yāvat tribhir iti. kāyavānmanoduṣcaritaiḥ. **niṣpratipakṣaṃ ceti.** pratideśanādi-pratipakṣābhāvataḥ. **akuśalaṃ cākuśalaparicāraṃ ceti.** yaḥ kṛtvāpy anumodata iti. **vipākadāne niyatam** iti. puṣṭākuśalalakṣaṇasamutpādāt.

「乃至、三つ〔の悪行〕によって」とは、「身語意の悪行によって」である。「及び対治を有していないものである」とは、悔過などの対治がないからである。「不善であって、さらに不善の助伴をとまなう」とは、或る者が〔不善を〕為してからさらに〔それを〕随喜する、ということである。「異熟を与えることについて決定しているものである」とは、多くの不善の相を起すからである。

ここで特に重要となるのは（２）円満である。すなわちある一つの業が、造作業から増長業になるためには、その他に別の身語意行や業道が助因として必要な場合があると説かれている。殺生などの十業道とは身悪意行のうちで粗顕な十を選んだものであり⁽³⁵⁾、身行・語行とは身業・語業と同義である⁽³⁶⁾。したがって、ある業が増長業となるためには、その業単独で増長業にはならず、その業に関連して付随しているその他の表や無表などが助因として必要な場合があると考えられていることが解る⁽³⁷⁾。これと同趣旨は、『大毘婆沙論』巻119（T27. 618b11-20）；『順正理論』巻44（T29. 593c10-24）；『藏頭宗論』巻24（T29. 890c06-17）においても説かれている。

2. 3. まとめ

このように無表（avijñapti）は、表（vijñapti）などと同様に、それによって構成される行為が全体の軽重を決定したり、他業に影響力を及ぼしたりして、その業の与果を決定的にするための助因としての役割を担っているものと考えられる⁽³⁸⁾。

3. 結論

以上、本稿では、処中（非律儀非律儀）の無表（avijñapti）の役割について、１）何故に根本業道に設定される必要があるのか、２）当該の行為に対してどのような役割を担っているのか、という二つの問いから考察をすすめた。次の二点が指摘される。

- (1) 根本業道に無表が設定される理由は、因果の時間的逆転現象を防いで三世実有説に基づいた因果則を守るためであると考えられる。すなわち有部の因果則に基づけば、未来法・現在法が因となって過去法に対して取果・与果することは決してない。よって、加行であった法が、その後の何らかの事情で、急遽、根本業道に再設定されるとは法相上あり得ない。

そのため、根本業道が未来に何らかの影響を及ぼすと考えする場合（たとえば殺生が成立した場合には、成立しなかった場合よりも重大な異熟を招くとする場合など）には、目的が達成されたのと同じ刹那に、その根本業道に相当する何らかの法が存在し、それが未来の果を取らなければならないと理解されている。もしも身語の業道が遂行され、根本業道の刹那に表が存在しない場合には、何を根本業道に設定すればよいのかという問題に直面する。そこで有部では無表という教理を設けることによって、この問題を解決している。

- (2) 行為の構成要素の一つである無表は、その当該行為の軽重を決定する助因としての重要な役割を担っている。一つの行為のうちには加行・根本・後起に属する無表が多数存在しており⁽³⁹⁾、これらが助因として働くことで、業の与果を決定的なものにしたり、逆に与果を妨げたりする働きがあるものと考えられる⁽⁴⁰⁾。

なお本稿では無表が異熟果を取るのかどうかについては詳しく言及しなかったが、これは「無表は異熟果をとらない」ことを意味しているのではない。有部法相に従えば、無表が「戒」として説かれようとも、「業道」として説かれようとも、「助因」として説かれようとも、有漏法であるからには異熟果を取ると考えられる⁽⁴¹⁾。これについては稿を改めて論じてゆく予定である。

註

- (1) 青原令知 [2005] [2006]
- (2) AKBh. (pp. 196.6-9); 舟橋一哉 [1987: pp. 39.13-40.2] を参照。
- (3) AKBh. (p. 196.10-12); 舟橋一哉 [1987: p. 40.2-5] を参照。ただし原文の 'titānāgatapratyutpanno は、チベット訳・諸漢訳より 'titānāgatapratyutpanne に改めるべきであろう。
- (4) AKBh. (p. 196.12-16); 舟橋一哉 [1987: p. 40.6-10] を参照。
- (5) AKBh. (p. 196.16-18); 舟橋一哉 [1987: p. 40.11-14] を参照。
- (6) AKBh. (p. 196.18-20); 舟橋一哉 [1987: pp. 40.15-41.2] を参照。
- (7) AKBh. (p. 196.20-24); 舟橋一哉 [1987: p. 41.3-8] を参照。
- (8) AKBh. (pp. 196.24-197.2); 舟橋一哉 [1987: p. 41.9-10] を参照
- (9) AKBh. (p. 197.2-3); 舟橋一哉 [1987: p. 41.11-13] を参照。
- (10) 『大毘婆沙論』卷122 (T27. 634c09-26):
 為止如是譬喻者意。顯自所宗。表無表業皆是實有。故作斯論。(1)若諸表業無實體者。則與契經相違。如契經言。愚夫希欲說名為愛。愛所發表說名為業。(2)又契經言。在夜尋伺猶如起煙。且動身語猶如發焰。(3)若無表業無實體者。則亦與契經相違。如契經說。色有三攝一切色。有色有見有對。有色無見有對。有色無見無對。若無無表色者。則應無有三種建立。無第三故。(4)又若撥無表無表色。吠題咽字。未生怨王。應當不觸害父無間。謂發表位父命猶存。父命終時表業已謝。由先表力得後無表故。未生怨觸無間業。(5)又彼杖髻出家外道。亦應不觸害應無間。謂發表位目連命猶存。目連涅槃時表業已謝由先表力得後無表故。彼外道觸

無間業。(6)又若撥無表無表業。應無建立三品有異。謂住律儀品。住不律儀品。住非律儀非不律儀品。

- (11) 『成実論』卷7 (T32. 290a19-22):

問曰。何法名無作。答曰。因心生罪福。睡眠悶等。是時常生。是名無作。如經中說。若種樹園林造井橋梁等。是人所為福晝夜常增長。

『成実論』卷7 (T32. 290a28-b09):

問曰。不以離故生天。以善心故。答曰。不然。經中說。精進人隨壽得福多。故久受天樂。若但善心云何能有多福。是人不能常有善心故。又說。種樹等福德晝夜常增長。又說。持戒堅固若無無作。云何當說福常增長及堅持戒。又非作即是殺生。作次第殺生法生。然後得殺罪。如教人殺。隨殺時教者得殺罪。故知有無作。又意無戒律儀。所以者何。若人在不善無記心若無心。亦名持戒。故知爾時有無作不善律儀亦如是。

- (12) 加藤精神 [1928]; 荻原雲來 [1928]

- (13) 舟橋一哉 [1954]; Dhammajoti [2007a] (= [2009a])

- (14) 無表の研究史については清水俊史 [2014e] を参照。

- (15) Pradhan: svabhāvaviśeṣād, 平川訂正表: svabhāvaviśeṣād

- (16) Wogihara: na hy ājñāpanavijñaptēḥ karmapatha upayujyate, Pradhan: na hy ājñāpanavijñaptiḥ maulaḥ karmapathō yujyate

- (17) Pradhan: pūrvavat, 舟橋一哉 [1987: p. 50 註18]: pūrvam

- (18) AKVy. には na hy ājñāpanavijñaptēḥ karmapatha upayujyate とあるが、引用元であると考えられる AKBh. の na hy ājñāpanavijñaptiḥ maulaḥ karmapathō yujyate にあわせて訳出する。

- (19) 表が現起していれば無表は生じないという意味ではない。

- (20) 『大毘婆沙論』卷122 (T27. 634c17-21)

- (21) 『大毘婆沙論』卷122 (T27. 634c21-24)

- (22) AKVy. (p. 226.9-16):

vartamānāḥ phalaṃ pañceti. vartamānā eva phalaṃ **gr̥hṇāntīty** avadhāraṇaṃ. pratigṛhṇāntīti. ākṣipanti hetubhāvenāvatiṣṭhanta ity arthaḥ. **kāraṇahetur apy evam** iti. vartamānā eva phalaṃ pratigṛhṇānti natito nānāgato vā. **sa tu nāvaśyaṃ saphala iti nocyate.** hy asaṃskṛtaṃ kāraṇahetur iṣyate. na cāsya phalaṃ asti. anāgataś ca kāraṇahetuḥ. na ca pūrvam utpadyamānena dharmeṇa saphalaḥ.

「現在なる五つが、果を」とは、「ただ現在の〔五つ〕のみが果を取る」と限定するのである。「取る」⁽¹⁾とは、「引き起こす」,〔即ち〕「因として住する」という意味である。「能作因も同様に」とは、「ただ現在なる〔能作因〕のみが果を取り、過去なる、あるいは未来なる〔能作因は果を取ら〕ない」ということである。「けれどもそれ〔能作因〕は必ず果を持つわけではないので、〔本願中に〕説かれていない」とは、なぜなら、無為〔法〕は能作因として許容されるがそれに果はなく、また未来なる能作因は、以前に生起しつつある法をもって“果をもつ”とすることはないからである。

⁽¹⁾AKBh.からの引用のように読めるが、Pradhan 本には該当する語が見られない。

(23) Pradhan: anayeh

(24) AKVy. (pp. 226.17-26):

dvau prayacchata iti. vartamānāv adhikṛtaṃ. sahabhūsaṃprayuktakahetū vartamānāv eva phalaṃ prayacchataḥ. yuktaṃ tāvad yad atītāv iti. niṣyandaphalena saphalāv etāv uktau. sabhāgasarvatragayor niṣyanda iti vacanāt. **atha kathaṃ vartamānau niṣyanda-phalaṃ prayacchataḥ.** na hi tayo vartamānāvasthāyāṃ niṣyando dṛśyate ity ata āha. **samanantaranirvartanāt.** kiṃ. phalaṃ prayacchata ity adhikṛtaṃ. **tau cāpy atītau bhavata** iti. hetuphalayor asamavadhānāt. **na punas tad eva datta** iti. na punas tad eva phalaṃ prayacchata ity arthaḥ.

「二は〔現在にある時、果を〕与える」とは、「現在にある〔二つは〕」と係り、「俱有・相應の両因は、現在にある時に果を与える」ということである。「まず、過去にある〔二因が与果することは〕理に適っている」とは、等流果について果のあるものとしてこの二つが説かれている。「同類と遍行とは等流〔果〕がある」(AKK. 2, 56cd)と説かれているからである。「しかるに、どうして現在にある〔二因〕が等流果を与えるのか」とは、なぜなら、それら二〔因〕の現在位において等流〔果〕が見られないから、それゆえに答える。「〔因の〕無間に〔果が〕転起するからである」〔と〕。〔それで〕どうなのか。「果を与える」と係る。「その二つは過去においてあり」とは、〔同類と遍行の二〕因と〔等流〕果とが同時に存在することはないからである。「同じそれ（既に与えられた果）を再び与えることはない」とは、「重ねて同じその果を与えることはない」という意味である。

取果・与果の概略については櫻部建 [1978: pp. 139.6-142.2] を参照。なお、直接連続する二刹那をもって同類・遍行の両因と等流果との関係を理解する場合には、因が現在位にある時には、既に正生位 (utpadyamānāvasthā, 現在になる直前の位) に果があるため、因は現在にありながらも与果すると考えられている。〈異熟因―異熟果〉の場合には、異熟因の次刹那に異熟果は起こり得ず、かならず業果のあいだに一刹那以上間隔を置かなくてはならない。これについては櫻部建 [1978: p. 140.4-10] を参照。

(25) すなわち、たとえ殺生が完成した瞬間に、その殺生と関連する思(cetanā)が生じていたとしても、その思(cetanā)を業道として設定することは出来ない。なぜなら、殺生は意業(=思)ではないからである。

(26) 『大毘婆沙論』巻122 (T27. 634c17-21); 『順正理論』巻35 (T29. 542c10-12) = 『藏頭宗論』巻18 (T29. 861c22-25)

(27) 衆賢は、欲界の衆同分は思(cetanā)によってしか引かれたいと理解しているため、このような文脈になっている点に注意しなければならない(『順正理論』巻16 (T29. 427c23-29)を参照)。すなわち殺生を為そうと決意した思(cetanā)の異熟によって地獄に堕ちるのだが、その与果を決定的にするためには無表(avijñapti)という助因が必要である、というのである。

(28) 当然ながら「助因を欠いていれば殺生業が異熟果を与えない」という意味ではない。

(29) 『順正理論』巻35 (T29. 543a06-11):

即彼先表及能起心。在現在時。為因能取今所造色為等流果。於今正起無表色時。彼在過去能

與今果。唯彼先時所起思業。於非愛果為牽引因。後業道生。能為助滿。令所引果決定當生。如是所宗。可令生喜。

即ち彼れの先の表及び能起の心、現在に在る時、因と為って能く今の所造色を取りて等流果と為す。今、正しく無表色を起す時に於て、彼れ過去に在りて能く今の果を与ふ。唯、彼れの先の時に起こす所の思業、非愛の果に於て牽引の因と為る。後に業道生じて、能く助滿をなし、引く所の果を決定して当に生ぜしむ。是くの如き所宗は、喜びを生ぜしむべし。

『順正理論』巻43 (T29. 587b25-28):

若造多逆初一招無間獄生。餘應無果。無無果失。造多逆人。唯一能引餘助滿故。隨彼罪增苦還増劇。謂由多逆感地獄中大柔軟身多猛苦具。受二三四五倍重苦。

「若し多逆を造れば、初めの一、已に無間獄の生を招く。余は応に果無かるべし」。果無き失無し。多逆を造る人、唯一、能く引いて余は助滿するが故に。彼の罪の増すに随って苦還つて増して劇す。謂く多逆に由りて地獄の中の大柔軟身と、多の猛苦具とを感じ、二・三・四・五倍の重苦を受く。

- (30) Pradhan: *add na*, 舟橋一哉 [1987: p. 507 註1]: *omit*
- (31) Pradhan: *-yamyenā-*, 舟橋一哉 [1987: p. 507 註2]: *-yamyā-*
- (32) Pradhan: *karaṇaiḥ*, 舟橋一哉 [1987: p.510 註1]: *kāraṇaiḥ*
- (33) Pradhan: *samāpattitaḥ*, 平川訂正表: *samāptitaḥ*
- (34) Pradhan: *vipākadāna*, 舟橋一哉 [1987: p.510 註]: *vipākadāne*
- (35) AKBh. (p. 238.2-12); 舟橋一哉 [1987: pp. 308.9-309.9] を参照。
- (36) AKK. 4, 64-65
- (37) 複数の業が共同して一つの衆同分を引くとは考えられない。なぜなら AKK. 4, 95a に説かれるように、衆同分は必ず一業によって引かれるからである。したがってここでは、一つの業が一つの衆同分を引くために、その他の業がその助因になっている、という意味である。
また無表とは無関係であるが、(1) 故意では、先に思を起こしているか否かが後の業の軽重に影響を起こすことが説かれている。このように表や無表のみならず、前後に生じた種々の法が影響しあうことによって業の重さが決定されると考えられる。
- (38) この文脈を一読すると、無表には助因としての役割だけがあり、無表それ自体は異熟果を持たない、というように誤解してしまうかもしれないが、そういう意味ではない。衆賢は、欲界の衆同分は思 (*cetanā*) によってしか引かれなと理解しているため、このような文脈になっている点に注意しなければならない (『順正理論』巻16 (T29. 427c23-29)を参照)。衆賢も、無表が満業になることを認めている以上、異熟果をもつと理解していたことは疑いない (『順正理論』巻16 (T29. 427c19-21)を参照)。
- (39) 有部の一説 (AKBh. (pp. 253.22-254.22) を参照) によれば、殺生などの業道と果との関係については、加行が異熟果を、根本業道が等流果 (厳密に言えば異熟果・増上果に含まれる)、後起が増上果を招くと考えられている。これに従えば、この加行に属する表や無表が来世を決定することになる (ただし衆賢の理解に従えば欲界の身語業は引業にはなれないため、その場合には、その業を起こした能起の思が来世を招くと考えられる。『順正理論』巻35 (T29. 543a06-11)

を参照。

- (40) 一つの行為のうちには、膨大な数の思 (cetanā) や、表・無表が存在すると考えられるが、そのうちどれがどのような果報を招くのかについては AKBh. では言及がない。しかしながら、衆賢は能起の思こそが欲界の引業になると考えているようである (『順正理論』巻16 (T29. 427 c23-29) を参照)。
- (41) 加藤精神 [1954: p. 226.a6-11]

Abbreviations

- ADV. P. S. Jaini (ed.), *Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāvṛtti*, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1959.
- AKBh. P. Pradhan (ed.), *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.
- AKK. *Abhidharmakośa-Kārikā*.
- AKUp. *Abhidharmakośa-ṭīkā Upāyikā* (chos mngon pa'i mdzod kyi 'grel bshad nye bar mkho ba zhes bya ba), Peking No. 5595, Derge No. 4094. (AKUp. [xxxx] とあるうちの xxxx については本庄良文 [2014] における比定資料番号を参照)
- AKVy. U. Wogihara (ed.), *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra*, 山喜房佛書林, 1971 (復刻版).
- T 大正新脩大藏經.

Bibliography

Dhammajoti, KL.

- [2003] “The Karmic Role of the Avijñapti in Sarvātsivāda,” *Bukkyō kenkyū* 佛教研究 [Buddhist Studies], Vol. 31, pp. 69-90.
- [2007a] *Sarvāstivāda Abhidharma*, Hong Kong: Centre for Buddhist Studies, (3rd rev. ed.).
- [2009a] *Sarvāstivāda Abhidharma*, Hong Kong: Centre for Buddhist Studies, (4th rev. ed.).

青原令知

- [2005] 「初期有部論書における無表と律儀」, 『印度学仏教学研究』53(2), pp. 129-133.
- [2006] 「初期有部論書における無表と律儀 (承前) — 律儀の用例 —」, 『岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要』6, pp. 29-75.

荻原雲來

- [1928] 「加藤氏の業感縁起論の誤解に就いてを讀みて」, 『大正大學々報』4, pp. 13-20.

加藤精神

- [1928] 「「業感縁起論の誤解」に就いて」, 『大正大學々報』3, pp. 27-47.
- [1954] 「有部宗の極微に關する古今の謬説を匡す」, 『印度学仏教学研究』2(2), pp. 224-226.

櫻部建

- [1978] 「アビダルマ仏教の因果論」, 『仏教思想 3 因果』, 平楽寺書店, pp. 125-146.

清水俊史

[2014e]「説一切有部における随心転の無表一静慮律儀と無漏律儀の得捨一」,『佛教文化研究』58, pp. 1-21.

本庄良文

[2014]『俱舍論註ウパーイカーの研究 訳註篇』全2巻,大蔵出版.

舟橋一哉

[1954]『業の研究』,法蔵館.

[1987]『俱舍論の原典解明 業品』,法蔵館.

- ・ 論文中的下線部は註釈に引用される箇所を, **太字**は引用文を意味している。
- ・ 論文中的『俱舍論』梵文訳の界品・根品については櫻部建訳と荻原雲來・山口益訳を,業品については舟橋一哉訳を参照し,漢訳資料の書き下しについては『国訳一切経』を参照している。

(しみず としふみ 特別研究員)